# 春の發句

土田龍太郎

年こそ替はれいまだ雪げにさゆる空にはや春きざせりとおどろかすはいつしかをちこちに立ちそめし霞にほかなし。四方の霞の立つからにやがて春來にけりと知らるること、たとへば

昨日こそ年は暮れしか春霞
春日の野べにはや立ちにけり

と人丸の詠めりしがごとし。

霞といふもの初春にかぎれりしにもあらぬはさることにて、風のかつ吹きかつ止むにまかせて盛りの花の見えつ隠れつ定めなきさま

風になびく霞に花の見えがくれ
ともや云ひつべからむ。かかるけしきにつきてただ
花さそふ嵐にはるる霞かな

とばかり云ひてやみなむはいささかことふりて聞ゆめれば、なほあかずおぼゆらむずるぞかし。

春たけなはに時めける盛りの花の霞におほはれたる粧ひ、若き女（をみな）のただ白き帷（かたびら）ばかりまとひてたたずめる姿に擬（なぞら）ふるをうべけれども、櫻色のやは肌の薄衣より透（す）きたるにたればなまめけることこよなければ

色とほす霞ぞ花の薄衣

とおのづから口遊まれでやはあらむ。ほぼ同じおもむき

春霞立つや花色薄衣

とも云ふをうべし。こは霞の立つを衣を裁つに見たてたるなり。

ほかに春のけしきによせてわがものせる發句、ついでもなく想ひ出づるままに引きみるべし。

春なれや雪間の草のかくれ水
去りがての春のとまりかおそ櫻
春雨にぬれて色そへあさみどり
遠くなる春をみやまの花ぐもり
はれてなほ雪をみやまの春霞
花の色は見ゆや見えずや薄霞

朧夜や匂ふはいづこ梅の花

右にはをりをりにわが筆先より出でし句ども、拙きをもかへりみで列ねたれども、心ある人はいかに見るらむ、いとも恥がましきのみ。

春景色のたへにうるはしきありさま、めでたき歌人の三十一文字に詠み下せるためし、古へよりいとあまたなることさらにいはでもありなめども、うちつけに心ひかるる月花のはかなきおもむきをとりもあへず十七文字のみにて短く云ひとむる刹那のきはやかなるわざ、三十一文字の詠歌にもなほまさるためしなきにしもあらじとぞおぼゆらむかし。

さればまづ鑑ともせまほしきは中比の連歌師の遺せる發句なれども、かかる句に戯謔のおもむきなくともことたりぬべし。なまじひに俳諧めきて聞えなばなかなかほいなかるべければ、同じく十七文字なれども近き世に盛ゆる俳諧のことはをさをさ考ふまじきにこそ。

（令和七年十月二十三日受附）